

## 発刊にあたって

山田礼子  
同志社大学

2008年3月に初年次教育学会が発足して早3年が過ぎ、初年次教育学会誌を発刊するのも今年で4回目になる。編集委員会は設立時から2回の組織替えを経て、今日に至っているが、学会誌を発行するにあたっては、編集委員長、副編集委員長をはじめ編集委員会の皆さんには常に大変な編集作業に当たっていただき、心から感謝をする次第である。

中央教育審議会の2008年の答申『学士課程教育の構築に向けて』のなかでも、初年次教育は「高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習および人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、主に新入生を対象に総合的につくられた教育プログラム」あるいは「初年次学生が大学生になることを支援するプログラム」として明記され、実際に、初年次教育は学士課程教育のなかで正規の教育として位置づけられていることは、学会に毎年多くの会員が参加し、かつ発表内容も多くの広がりを見せていることから明らかであるといえよう。

一方で、大学の種別や個性によって提供する初年次教育の内容や目標も異なってきたのが実際の現状といえる。それゆえ、初年次教育のニーズも多様となってきたことは否定できない。初年次教育学会がそうした大学の種別や目標に合わせて初年次教育モデルやペダゴジーを研究あるいはノウハウの交換や担当者の交流を通して収斂していく場となっていかなければならないことを痛感している。

今回の投稿数は、研究論文4編、事例研究論文5編であり、最終的には2本の研究論文を事例研究論文に変更するというので、事例研究論文6本が掲載されることになった。年々、初年次教育学会の発表においても、投稿論文においても、個々の大学の事例や実践に偏る傾向がみられるようになってきている。もちろん、そうした動向は、多様なニーズや初年次教育内容の広がりを反映して、歓迎すべきことである。一方で、初年次教育をひとつの普遍的なプログラムとして位置付けていくためには、初年次教育に関する体系的な研究も充実させていかねばならないのではないかと。そういう意味で、来年5周年を迎える本学会も曲がり角に来ているといえるかもしれない。

初年次教育のような実践性や効果的なプログラムの開発が求められる領域のニーズにもこたえられるように、学会では努力を積み重ねていくと同時に、高い質の研究成果を積み重ね、初年次教育の学問としての体系性を確立できるように、研究の蓄積も意識しながら今後の充実を企図していきたい。

(初年次教育学会会長)